「松方コレクションとパリの画商――INHA所蔵のレオンス・ベネディット資料の紹介（1）」

陳岡めぐみ

松方幸次郎（1866-1950）のフランスにおける美術品収集の協力者レオンス・ベネディット（1859-1925）は、現代作家のための美術館であるリュクサンブール美術館の館長を1892年からつとめつつ、多くの著作を残した美術史家である[1]。諸外国を精力的に旅行して国内外の芸術家やコレクターと交流、国際的な視野に立って同美術館の作品収集を進めた。1893年のフランス・オリエンタリスト画家協会の設立者としても知られる。そして彫刻家オーギュスト・ロダンとの関係では、1917年に死去したこのフランス近代彫刻の巨匠の遺作の管理者となり、1919年に開館したロダン美術館を実質上の館長として1925年に死去するまで率いた。

ベネディットと松方の最初の出会いは第一次世界大戦終戦間際の1918年8月のパリである。当時、松方は川崎造船所社長としてロンドンに駐在しており、3年ぶりの帰国を目前としていた。ベネディットへの紹介者はイギリスにおける収集の協力者であった画家フランク・ブラングィン、そしてロンドンのコレクター、エドマンド・デイヴィスであり、美術館建設を目指す日本の美術愛好家を紹介する手紙をそれぞれパリへ送っている。松方の面会の目的はロダン彫刻のブロンズ鋳造の契約であったが、ベネディットはフランス側での美術品の購入全般に関わることとなる。以降、2人は緊密に連絡を取り合いながら収集を進め、購入された作品はロダン美術館の一角に保管された。知られている通り、この作品群は、第二次世界大戦末期のフランス政府による接収と戦後の寄贈返還を経て、1959年の国立西洋美術館設立へつながる。

松方コレクションに関係するベネディットの主要な資料群は、現在、ロダン美術館とフランスの国立美術史研究所（INHA）に保管されている。神戸、パリ、ロンドンを行きかった手紙をはじめ、松方コレクションの収集期から散逸期にわたるこれらの資料群はこれまでも先行研究で参照されており、筆者もとくに『松方コレクション　西洋美術全作品』[2]編纂にあたって入手作品の概要の把握を主眼として参照した。だが、多岐にわたる情報が含まれていることから、あらためて検証すべき点も多く、周辺資料と照合しつつ、個々の事例をより詳細に検討する必要がある。資料群の全体像を提示することで、今後の新たな調査研究につながる可能性もあるだろう。本稿ではまずINHAの資料群にもとづき、松方がベネディットを通じた収集を開始してからヨーロッパに再滞在するまで、すなわち1918年秋から1921年春までの時期をとりあげ、競売や画商との関係を中心にたどる。

2つの競売

INHAが保管する松方コレクションに関わるベネディット資料群（BCMN Ms 375/6/5/1～6/5/3）は、かつてはルーヴル宮内の国立美術館図書室

（Bibliothèque centrale des musées nationaux）で保管されていたが、2016年にINHAに移管された。中身は6/5/1から6/5/3まで3つに分類されている。6/5/1はベネディットが受け取った手紙や電報、彼の手紙の草稿や覚え書きなど（ff.1 ～332）、6/5/2は保険の証書類（ff.1 ～46）、6/5/3は画商からの請求書類などを主とし（ff.1 ～49）、いずれも基本的には年代順に整理されている。

6/5/1の資料群は、ロダンのブロンズ鋳造に関する松方とベネディットの契約書（1918年8月22日付）に始まり、作家や作品に関する両者のあいだの手紙のやりとりとともに、ベネディットと、松方の収集の経理事務を引き受けていたロンドンの鈴木商店とのあいだの支払いをめぐる連絡が定期的に続く。パリのベネディットは、松方のために入手した作品がロダン美術館に搬入されると、ロンドンの鈴木商店へ作品保管証の役割も持つ手紙を送り、作品情報と価格を知らせて支払いを促す。ロンドンから小切手が送られてくると、その受領書がパリから送られる。松方はフランスにおける収集の開始に際して、鈴木商店に「絵画、彫刻、ブロンズ」の購入のためとして120万フランを預け、作品の選択はベネディットに委ねていたが、次第に収集規模は拡大し、購入予算は膨らんでいく。

ベネディットは鈴木商店側に対して、「友人として、そして私の役職、芸術家たちとの関係、専門的な能力ゆえに」、松方が自分にロダン作品の鋳造と絵画類の購入を依頼したのだと説明している[3]。彼にとって松方の収集への協力は、フランス美術を諸外国に広く紹介しつつ、国際的な美術動向の中に位置づけるという意義があった。「極東でフランス美術の名声を高めてくれる」松方の美術館の設立に強い関心を持っていること、そこに協力できることへの感謝を松方に繰り返し伝えている[4]。

一方、ベネディットが率いた2つのフランスの美術館は当時いずれも潤沢な予算に恵まれていたわけではない。とくに草創期のロダン美術館にとって、松方からの大口のブロンズ鋳造注文が重要な資金源となったことは早くから指摘されている[5]。また、購入予算も展示スペースも限られていたリュクサンブール美術館の仕事[6]とは別に、新しい美術館のために高額作品の収集を自分の采配で進められることには美術館人としてのやり甲斐も見出したことだろう。さらにビュレイ=ユリブは、ベネディットが松方の収集の手伝いにあたって相当の手数料を得ていたとも推測しているが、後述するように、この点についてはより慎重に調べなくてはならない。少なくともINHAのベネディット資料群に含まれる画商からの請求書を見るかぎり、ベネディットのもとに届いた請求書に記載された金額と鈴木商店へ回された金額に違いは見られなかった。ただし、画家たちへの支払いについては、ベネディットの申告額しか判明しておらず、実際に画家たちに支払われた金額は今後、個別に確認する必要があるだろう。

絵画の購入は、松方の1918年11月の帰国に先立って10月には始まっており、ベネディットと鈴木商店とのあいだでシャルル・コッテ、オーギュスト・ポワントラン、アンリ・アルピニーの作品（M294、305、309、312-314、554、872、875-877）の支払いをめぐる連絡がおこなわれている[7]。11月にはレオン・レルミット、

アルベール・ベナール、シャルル・カザンを訪ねるための汽車賃の請求もされており、パリ市内のみならず、ベネディットが地方在住の画家のもとへも足を運んで交渉している様子がうかがわれる[8]。

フランスの現存画家の作品を中心とした購入はやがて画商からの高額の作品の購入へ拡大していくが、競売を通じた入手を示す初期の資料も残っている。画商からの請求書類を主とする6/5/3の資料群は、パリの競売館オテル・ドゥルオの競売吏から届いた2つの競売における落札の書類からはじまる。1918年のエドガー・ドガ（1834-1917）のアトリエの競売と、1920年のエマニュエル・アルフレッド・ブールドレ（1847-1919）のコレクションの競売である。

前者については、1917年9月に死去したドガのアトリエに残されていた膨大な作品のために、第一次世界大戦中の1918年から1919年にかけてパリで開かれた競売のひとつである。ドガはコレクターでもあり、アトリエには彼自身の作品に加え、買い集められた他作家の作品も多数残されていた。ベネディットは、1918年11月16日の回でアルフォンス・ルグロの油彩《海岸警備の兵舎》（M646、1,400フラン）（fig.1）、12月11日の回でドガのパステル《髪をとかす女》（M1518、1,600フラン）（fig.2）を落札[9]、各々の落札価格に競売の手数料10%を上乗せしつつ、翌年1919年1月に鈴木商店へ支払いの連絡をおこなう[10]。

ベルネーム=ジュヌとデュラン=リュエルら有力画廊が取り仕切ったこの大規模な競売では、ルーヴルやメトロポリタン、ロンドン・ナショナル・ギャラリーをはじめ国内外の主要美術館とその代理人、コレクター、画商たちが作品を求めて競い合ったことが知られる[11]。ベネディットはリュクサンブール美術館のためにもこの競売で作品の入手をはかっている。だが、戦争の影響でフランス政府の予算は限られており、ルグロの油彩画1点と素描3点を入手するために5,000フランを得ていたものの、落札できたのは素描だけという状況であったともいわれる[12]。

このときの松方とのやり取りは不明だが、話題を呼んだドガの競売に関する情報は、ちょうど1918年から1919年秋にかけてロンドン、パリ、ニューヨークに滞在していた松方の耳にも入っていたかもしれない。また、1919年7月頃、ベネディットは松方のためにポール・ラフォンの『ドガ』全2巻（Paul Lafont, *Degas*, Paris: Floury, 2 volumes, 1918-1919）を購入している[13]。数は多くないが、ベネディットは松方のために美術書も購入しており、これはおそらく最初の例である[14]。

のちに松方コレクションには、ヴィルヘルム・ハンセンのコレクションを経由して、このドガの競売に由来するドガ《マネとマネ夫人の肖像》（M373、北九州市立美術館所蔵）とエドゥアー

fig.1
アルフォンス・ルグロ《海岸警備の兵舎》　油彩・カンヴァス　国立西洋美術館

fig.2
エドガー・ドガ《髪をとかす女》　パステル・紙　1896-1899年頃　国立西洋美術館

ル・マネ《ブラン氏の肖像》(M688)という重要な作品が加わっている。コペンハーゲンの実業家ハンセンはドガの競売に代理人を送って参加したコレクターの一人であった[15]。また、直接の購入元は不明だが、松方がベネディットを介して1921年10月頃に入手する《女性の肖像》(M375)もドガの競売に由来する。この作品については、おそらく第二次世界大戦期に水の被害を受けて甚だしい破損状態にあるが、カンヴァス裏の木枠に辛うじて残るラベルに競売のロット番号「40」を読み取ることができる。

一方、家具職人、画商としてパリで活躍したブールドレは、引退後、美術品の収集に励み、とくに優れた素描コレクションを残したことで知られる。1919年の彼の死後、絵画から素描、版画、装飾芸術品にいたる大コレクションの競売が1920年から1921年にかけて何度も開かれた。そのうち6月2-4日の競売は同コレクションにおける最良の近代素描の半数が出品されたといわれるが[16]、ベネディットはこの回で6点の素描を落札、翌月、そのうち4点を松方のための購入作品として鈴木商店に報告している[17]。残りの2点は100フラン前後の安価な小品であることから、自分のための購入だろう。

松方のための4点の落札作品は、競売吏から送られてきた書類には、ロダンの素描3点とロダンのパステル1点と誤記されているが、ロット番号や価格の照合から正しくは、ロダンの素描2点、《誘拐のための習作》(M1757)と《蛇をまく男》(M1762)、および、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌのパステル2点、《悪天候》(M1743)と《トレヴーの肖像》(M1741)(fig.3)である。落札価格は順に4,800フラン、2,000フラン、6,600フラン、4,700フランで、いずれも現存作家の油彩画並みに高額であった。

競売吏レール・デュブルイユからベネディットへの請求額の総計は、全体の10%の手数料1,828フランを加えて、20,108フランであり、7月末にはこの金額の小切手を受領した知らせが競売吏からベネディットへ届いている[18]。一方、ベネディットから鈴木商店への連絡では、それぞれの金額に10%の手数料分を上乗せした金額と、他で入手したポール・ダルデのブロンズ彫刻《永遠の苦悩》(M1235)15,000フランとエルネスト・クォストの油彩3点(M901-902, 904)18,600フランを加えて、総計53,510フランの支払いが要求された[19]。ビュレイ=ユリブは、このベネディットが鈴木商店へ申告した金額と競売吏に払った金額の相違をひとつの例として、ベネディットが相当の仲介料を得ていたものと推測している[20]。しかし上述したように、53,510フランは他の作品と合わせた金額であり、この指摘は訂正すべきだろう。

fig.3
ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ《トレヴーの肖像》 パステル・紙 1895年 国立西洋美術館

さて、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌのパステル作品について、ベネディットは、1920年6月30

日の日付を持つ松方宛の長い手紙の草稿のなかで、ブールドレの競売で安価で手に入れた非常に希少な作品として紹介し、とくに画家の弟子を描いた《トレヴーの肖像》は、「ブールドレ・コレクションの珠玉［perle］」と称賛している[21]。このときの競売カタログの序文の執筆者はベネディット自身であり、そこでも次のような賛辞を記している。

> 「『ご覧あれ、私のピュヴィス・ド・シャヴァンヌを！その美しさがおわかりになるでしょう！ 美しい、とにかく美しいのです！』彼がこう叫んでいたときの声の調子が私にはまだ聞こえるかのようである。彼は最も大事な作品を、まるで私的な階上廊のように、彼の寝室に掛けていたものだ。ピュヴィス・ド・シャヴァンヌのパステル、シャセリオーのヴィーナス、ミレー。私はいったい何を知っているのだろう。これらの選りすぐりの作品はすべて、彼が寝ても覚めても眼が届くところに置きたかったものなのである」[22]。

ベネディットはこの競売の内部者ともいえる少々微妙な立場にいるが、19世紀末のフランス画壇の代表的画家であるピュヴィス・ド・シャヴァンヌについては、松方は以前からその作品がほしかったという言葉も残しており、彼の意向を汲んだ選択の可能性も高い。

fig.4
ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ《貧しき漁師》　油彩・カンヴァス　1887-1892年頃　国立西洋美術館

> 「2点のピュヴィス・ド・シャヴァンヌの絵。彼の作品はこれまでまったく確保できておらず、その作例の入手を切望しておりました。これであなたは、一人の紳士のコレクションから珠玉［a pearl］をもう1点に加えて手に入れてくださいました。私はこれらに対して喜びと幸運を感じずにはおれません。あらためて深謝申し上げます。」（松方からベネディットへの手紙、1920年9月1日）[23]

ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ作品に関しては、最終的に、松方コレクションには上記2点を含む油彩5点、素描3点が入っている。なかでも重要な作品は《貧しき漁師》（M891、fig.4）であるが、これは後述するように、翌1921年、パリのデュラン=リュエル画廊で購入される。

《ピュグマリオンとガラテア》

先に言及した1920年6月30日付の手紙の草稿をはじめとして、1920年の夏頃にベネディットが松方に長い手紙を何度も送った様子を示す複数の草稿が残っている。2人はこの頃、とくに頻繁な連絡を交わしながら、より高額作品の購入を含む本格的な収集へ向かおうとしていた。ベネディットが松方にロダンの《地獄の門》のブロンズ鋳造を勧めるのもこの時期のことだが、このテーマについてはここでは触れない。

6月30日の日付をもつベネディットの松方宛の手紙の草稿は2つある[24]。内容はそれぞれ異なり、最近入手した作品の報告や今後の作品入手の見込

みなどが詳細かつ具体的に記されている。まず1通が7月初旬に松方のもとに届き、その後、もう1通は8月中旬に届いたようで、その間にさらに別の手紙が7月から8月にかけてベネディットから送られており、松方からの返信と錯そうしている。

日本への到着の順序は前後するが、ベネディットが先にしたためていたと考えられる草稿（ff.61-63）の内容から先に紹介する。松方の質問に答えるかたちで、ロダンの大理石彫刻《ピュグマリオンとガラテア》（M1312、現所在不明）の来歴と価格の変遷に関する詳しい説明からはじまっている[25]。画商から持ちこまれたこの作品について、松方は部下の日置釭三郎をベネディットのもとに送って相談させようとしたらしい。ベネディットは松方に提示された価格が法外に高いことを指摘しつつ、作品がロンドンの競売に出品されていることを知らせる。

> 「あなたから手紙と電報をいただいていましたが、予告してくださっていた日置氏の来訪を待っておりましたのでお手紙には返答していませんでした。これ以上遅れることがないように、《ピュグマリオンとガラテア》の群像についてのあなたの質問にお答えします。件の大理石像は明らかにロダンが［ジュディット・］クラーデル嬢に贈ったものです。彼女はこれを50,000フランで画商のジョルジュ・ベルネームに売りました。この画商はこれを私の友人のひとり、ラロッシュ氏に売り、彼はこれに100,000フラン支払いましたが、この愛好家はこれをG.B.［ジョルジュ・ベルネーム］に戻したのです。同画廊で私はこの作品をまた見たのですが、125,000フランで売るといわれました――おそらく100,000フランで譲ってくれたでしょうが。したがって、あなたに提示された270,000フランは、仲介手数料を含むとしても、法外に高い価格です。さらに、この取引が面白いことには、最近、われわれの友人のエド［マンド］・デイヴィス氏がロンドンのクリスティーズで開かれた競売のカタログを送ってくれたのですが、そこに出品されたさまざまなロダン作品のなかにこの大理石作品も含まれているのです。競売はまさに昨日、29日に開かれたはずです。――デイヴィス氏にはこの大理石作品の落札値を教えてくれるように頼みました。価格はじきにあなたにお教えしますが、あなたにロダン作品の購入提案をしてくる仲介者や画商は皆いつも価格を高くつけてくることは明らかです。」[26]

ここで話題になっているのは、1920年6月29日にロンドンのクリスティーズで開かれた、いくつかの匿名のコレクションを集めた競売である。競売カタログによれば、ロット番号19に、「ジュディット・クラーデル夫人のコレクションに由来する」ロダンの《ピュグマリオンとガラテア》がある[27]。キプロスの王が自ら作った彫刻に理想の女性を見出して恋をするギリシャ神話を主題とするこの作品は、彫刻家ロダンにとっては、創造主としての自分の姿を反映させた作品のひとつである。大理石像はほかにニイ・カールスバーグ・グリプトテク美術館とメトロポリタン美術館の所蔵が知られる。もともとは、1910年にメトロポリタン美術館に寄贈された約97.2㎝の高さの作品（fig.5）が、ロダンの伝記の執

fig.5
オーギュスト・ロダン《ピュグマリオンとガラテア》　大理石　1889年作、1908-1909年頃に彫塑　ニューヨーク、メトロポリタン美術館

筆で知られるジュディット・クラーデルのために制作されたものだったが、彼女のアパートに置くには大きすぎるためにもう少し小さいバージョンとして第3の大理石像が新たに制作され、1916年7月にロダンから贈られた[28]。1920年のロンドンの競売に出された作品は、カタログの記載によれば、35インチ、約89センチメートルの高さであった。

上記のベネディットの手紙に対応する松方の手紙の返事は9月1日付で送られている。松方は結局、この作品の購入に踏み切らなかった。

> 「先月17日に、あなたから6月30日付のこの上なく興味深い手紙をありがたく頂戴したことを謹んでお知らせいたします。[……] ピュグマリオンとガラテアの群像に関するあなたの詳細なご説明に心より感謝申し上げます。その後、日置氏にはあれを指定の価格で買わないように指示しましたので、彼はおそらくあなたに会いに行かなかったのでしょう。あの作品はロダンの良い作品かもしれませんが、あの価格で買わずに済んで本当に良かったです。あなたはロダン作品をもっともよくご存じですし、あなたの評価を拠りどころとすべきですから。次のあなたからのお手紙で、ロンドンの競売でこの作品にどれほどの価格が付けられたか教えていただきたく思います。」[29]

ベネディットは7月半ば頃のものと思われる松方宛の手紙の草稿で、この作品は競売の直前に画商らしき所有者たちが引っ込めことを伝えつつ、作品購入を持ち掛けてくる画商やブローカーへの注意を再び喚起している[30]。結局、松方は9月の手紙の後、ベネディットを通じて作品を110,000フランで購入する[31]。この年の末、松方はニューヨークにいたベネディットの娘ローザに宛てた手紙のなかで彼への謝意を伝えている。

> 「ピュグマリオンとガラテア問題が解決し、あなたの御父上の親切な努

力のおかげで安く手に入れられたことに深謝申し上げます。とくにこの点については御父上によろしくお伝えください。」[32]

この件に関するベネディットの役割はもう少し詳しく調べる必要があるが、松方は、ベネディットを通じて、彼がベルネーム画廊から以前に聞いた価格に近い価格でこの作品を購入することができたわけである。7月18日と8月14日付のベネディットの手紙への回答として書かれた11月4日付の松方の手紙でも、ベネディットへの感謝の言葉と信頼が綴られている。

「ブローカーや模造品に対するあなたのご親切な警告に大いに感謝いたします。パリの画商から作品を買うことがあっても、最初にあなたに相談せずに買うことは決してないでしょう。」[33]

その後、この作品はパリのロダン美術館で保管された形跡はなく、そのままロンドンで保管されていたらしい。おそらくロンドンのパンテクニカン倉庫に保管されていた作品のリストの46番、《大理石の群像、ピュグマリオンとガラテア》（評価額は2,200ポンド）がこれにあたり、1939年の火災で灰燼に帰したと推測される。ブロンズ彫刻を主とする松方コレクションのロダン作品のなかで大理石の大型群像はめずらしく、惜しまれるところである。

高額作品の購入へ

上記の9月1日の松方の手紙の後半では、6月の手紙でベネディットが購入の報告をしていたアマン=ジャンやエミール・ベルナールらの名前を挙げて、その作品入手への労いが記されている。こうした同時代のサロン作家の作品の価格は高くても1万フラン前後であったが、この頃から、2人がモネやルノワールなどより高価格帯の作品の購入へ向かっていく様子が、ベネディットが松方に宛てたもうひとつの6月30日付の手紙の草稿（ff.64-66）を中心とするやり取りに見られる。

「クロード・モネを訪ねるはずでした。［……］私があなたの美術館のために彼のところで絵を選ぶことは伝えていますが、1点が30,000フランを下ることはまずないと思います。／ルノワールについては、来春に私は展覧会を開かなくてはならないのですが、遺族たちは、息子の一人が未成年なので、来年までは売却を希望していないものの、それ以前に作品入手することを私は絶望視してはいません。しかし価格については非常に高いままです。／13年前に死去したカリエールは友人で、1907年に私が彼の遺作展を開きました。彼のアトリエの競売で［……］少なくとも1点をあなたに購入してあげたかったのですが、価格が非常に高額になったために競り合うことはしませんでした。しかしあなたが作品をご所望されているのですから、家族や友人に会いに行ってみます。」[34]

これに対して松方は、「選んでおいた画家たちの作品に各々平均30,000フランを喜んで支払うので、それぞれの画家と契約を求む」という内容の7月8日付の電報をベネディットへ送っている[35]。また、この電報に先立つ7月3日付の松方からベネディット宛の手紙が最近フランスで売りに出された。興味深い内容なので、ウェブサイトで公開されたPDFにしたがい、以下に訳出する。作品の購入予算はこの時期に倍増している。

> 「私はあなたに、平均して30,000フランのミュージアム・サイズのいくつかの巨匠の絵の購入を依頼しておりましたが、もしルノワールとカリエールの良い絵があなたのお力で購入できるようでしたら、感謝に堪えません。サロンでモーリス・ドニの絵を買えるだろうとも教えてくださいましたね。良い絵が見つかればぜひとも彼の作品を5、6点購入していただきたく思います。私は彼の絵が大変好きなので手に入れることができれば大変うれしいです。[……]／1,200,000フランという当初の金額が上述の購入をおこなうにあたっては不十分のように思われるので、購入のためにさらに100万フランを充当するつもりです。ですので、遠慮なく私のギャラリーのためのマスターピースを選んでください」。[36]

モネ作品の購入にあたって、松方は、パリに滞在していた姪の竹子の夫・黒木三次や画家の児島虎次郎らの助けも借りつつ、翌1921年のパリ滞在へ向けて念入りに準備を進めていたことはすでに知られる[37]。最終的には、《睡蓮》を含む30点を超える作品（M761-793）がモネ自身と画商から購入される。

松方とベネディットがドニの作品購入の準備を進めていた様子もすでにたどられている[38]。上記の手紙からは、松方がドニを好んだ様子がうかがえて興味深いが、1921年のパリ滞在中にドニのアトリエを訪ねる計画もあったとされる。最終的には、画家自身やドリュエ画廊から20点を超す油彩と20点近い素描が購入された。いずれもナビ派時代のものではなく、古典的秩序への回帰を目指した後期の作品であり、とくにアルジェリア・イタリア旅行の主題の作品が多く占めることも指摘されている。

ドリュエ画廊とのあいだでは、ベネディットは1920年11月頃に松方のためにアルベール・マルケの油彩4点（M706, 709-711）も確保している[39]。マルケはフォーヴィスムの画家に数えられるが、1920年代にはパリとアルジェを往復しながら制作し、ジャン・ローノワやアンドレ・シュレダらと交流した。彼らオリエンタリストをはじめ、ベネディット周辺の画家たちと松方との関係については稿をあらためて記したい。

1906年に死去したウジェーヌ・カリエールについては、ベネディットが記している通り、1920年2月2−3日にパリでアトリエの競売が開かれている。のちに松方はカリエールの油彩6点（M208-213）を入手するが、このうち《カリエール夫人》（M211）と《読書する女性》（M212）は、このときの競売に由来する。直接の入手元は不明だが、松方の購入希望を確認したベネディットが競売の落札者に接触して入手した可能性もあるだろう。

ルノワールは1919年12月3日に南仏カーニュで死去し、そのアトリエには

油彩習作を中心とする700点以上の作品が残された。ベネディットが説明している通り、遺族がルノワールのアトリエの作品群の売却を始めるのは1922年以降である。ルノワールのカタログ・レゾネによれば、このアトリエの作品群に由来する《ラ・ロシュ=ギュイヨン》（M921）は、松方コレクションを経て、ドイツの個人コレクションに入っている[40]。しかし松方の購入を裏づける資料は現時点では見つかっておらず、詳細は不明である。

一方、ルノワールとピュヴィス・ド・シャヴァンヌ作品に対する松方の希望を確認したベネディットはデュラン=リュエル画廊を訪れる。1920年7月18日の日付を持つベネディットの松方宛の手紙の草稿には、長く付き合いのあるデュラン=リュエル氏に会いに行き、そこでいくつかの見事なルノワール作品とリュクサンブール美術館の《貧しき漁師》の素晴らしいレプリカを見たことなどが報告されている[41]。画商が見積もった価格はいずれも非常に高額で、ルノワールは200,000から300,000フラン、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌは300,000フランであった。

これに対して松方はまずベネディットに宛てた9月13日付の電報で、ルノワールとピュヴィス・ド・シャヴァンヌの作品に対してデュラン=リュエルが望む金額を確認してほしいと連絡している[42]。さらに11月4日の手紙でも質問を重ねており、関心の高さがうかがえる。

> 「あなたがデュラン=リュエル氏に彼のルノワールとピュヴィス・ド・シャヴァンヌをいくらの値段で手放す気持ちにさせることができたのか、教えていただければ大変幸いです」[43]

翌年1921年2月、講演のためにニューヨークに滞在していたベネディットは、パーク・アヴェニュー・ホテルのレターヘッド入り便箋に記された2月20日付の手紙の草稿で、当地でデュラン=リュエルに会ってピュヴィス・ド・シャヴァンヌとルノワール作品についてあらためて話したことや、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌの《貧しき漁師》はメトロポリタン美術館も狙っていることなどを松方に報告している[44]。とくにルノワールについては、デュラン=リュエルがニューヨークに運んできていた作品のうちの2点を見せてもらったとして、松方が次の渡欧でニューヨークに立ち寄るならば、自身で作品を検分できるだろうといったことも記されている。その1点については、日付はないが、同じホテルの便箋に記された別の草稿に詳しい描写がある。

> 「ひとつは、大きな油彩画で、高さが180近くあり、微笑む娘のそばで草上に跪く若い男性――昨年死去した、巨匠と当時とても親しかった画家フラン・ラミの肖像です――を描いたものです。」[45]

この作品は、ルノワールの友人の画家ピエール・フラン・ラミ、通称フラン=ラミ（1855-1919）がモデルをつとめた《恋人たち》（1875年、プラハ国立美術館、fig.6）と考えられる。175x130㎝という大型作品で、当時の所有者コンラッド・ピヌーからデュラン=リュエルに預けられていた[46]。木漏れ日が草の上にも娘

fig.6
オーギュスト・ルノワール《恋人たち》油彩・カンヴァス　1875年　プラハ国立美術館

fig.7
オーギュスト・ルノワール《アルジェリア風のパリの女たち（ハーレム）》　油彩・カンヴァス　1872年　国立西洋美術館

の肌や夏服にも落ちて青や黄に溶け合う様子はこの時期のルノワールに特徴的な描き方である。フラン=ラミはルノワールの印象派時代を代表する《ムーラン・ド・ラ・ギャレットの舞踏会》（1876年、オルセー美術館）のモデルのひとりでもある。

松方は1921年3月28日付の手紙でこう返信している。

> 「5月6、7日あたりにニューヨークに、そして6月初め頃にパリに滞在して、あなたと一緒に、あれら全ての絵や彫刻をよく見たいと考えています。／あなたからの手紙に同封されていたデュラン=リュエル氏からの手紙をよく読みましたが、そこで言及されていた作品群を見ることができればと思います。また、ルノワール氏の後期の作品（M. Renoir's later dates）もパリで見て回っておいてくださると嬉しいです。彼の良い作品をさらに見つけたいと考えていますので。」[47]

ここに記された通り、松方は1921年の4月に再び日本を出発し、ニューヨーク、ロンドンを経由してパリへ向かう。ニューヨークで松方はこの作品を実際に見たかどうは不明だが、購入にいたらなかった。価格条件が合わなかったのかもしれないが、松方が印象派の時代ではなく、「ルノワール氏の後期の作品」をより好んだ可能性もあるだろう。

一方、この手紙にある通り、1921年6月から10月にかけてパリに滞在した松方は、さまざまなパリの画廊でベネディットや在仏の日本人たちとともに作品を見て回る。同行者のひとりであった画家・和田英作は、デュラン=リュエル画廊で松方とともに見たルノワール《アルジェリア風のパリの女たち（ハーレム）》（M917, fig.7）、ピュヴィス・ド・シャヴァンヌ《貧しき漁師》、ミレー《春》（M756）を「殆ど世界的宝物」と絶賛している[48]。《貧しき漁師》ともに1920年からベネディットが松方のためにデュラン=リュエルと価格交渉をしていた高額のルノワール作品は、おそらくこの《アルジェリア風のパリの女たち》だろう。このルノワールの初期の重要作品は、1920年1月にベルネーム=ジュヌ画廊がデュラ

ン=リュエル画廊に50パーセントの持ち分の購入を持ち掛けて預けていた。松方による購入が決まった後、1921年12月31日にデュラン=リュエルはこの作品を全額で買い取ったうえで売却する[49]。ルノワール、ピュヴィスともに最終的な価格は250,000フランであった。1921年11月10日付のデュラン=リュエル画廊の請求書によれば、この2点とミレー《春》が合わせて800,000フランと記されており、3点を抱き合わせにすることで多少の値引きがなされたのかもしれない[50]。なお、「四季」を主題とする連作の装飾パネルのひとつであったミレー作品は300,0000フランで、松方のためにベネディットが購入した絵画のなかではおそらくこれが最高額である。

以上、1918年秋から1921年春にかけて松方とベネディットが神戸とパリで手紙や電報を交わしつつ、作品収集を進めた様子をたどってきた。ベネディットはロンドンの美術品市場の動向にも目を配りながら購入を進め、とくに1920年夏頃から収集の規模は拡大している。1917年にドガ、1919年にルノワールと、印象派の巨匠が次々と死去し、近代絵画が新たに市場に流通していくという時代背景も垣間見えた。

作家や作品に関する情報を提供しているのは、確かにベネディットであり、松方はその助言に感謝し、信頼を寄せていく。だが、両者のあいだで交わされた手紙の内容をそれぞれ照合させながら読み込んでいくと、その関係は決して一方通行ではなく、松方の側も手に入れた情報を注意深く検討し、自分の明確な意向と見解を相手に伝えていることがわかる。そこからは、「ステッキ買い」の逸話とはほど遠い、主体的に収集に関わる一人のコレクターの姿が浮かんでくる。とくに高額の作品購入は、松方が1921年に再びパリの地を踏み、画廊や画家のアトリエを訪れて実際に作品を自分の眼で見た上でおこなっている。1921年を中心とする松方とベネディットの作品収集の様子は稿をあらためて記すこととする。

[1] ベネディットの活動、業績については下記を参照した。Mathilde Arnoux, BENEDITE-Leonce - INHA（https://www.inha.fr/fr/ressources/publications/publications-numeriques/dictionnaire-critique-des-historiens-de-l-art/benedite-leonce.html 最終アクセス日：2023/1/9）. カロリーヌ・マチュー「レオンス・ベネディットと松方幸次郎」、展覧会図録『松方コレクション』、神戸市立博物館、2016年、194-201頁。

[2] 川口雅子・陳岡めぐみ編著『松方コレクション　西洋美術全作品』全2巻、国立西洋美術館／平凡社、2018−2019年。以下、本稿で言及する松方旧蔵作品について、Mを先頭として本書の収録番号を記す。また、現所在の記載がないものはすべて国立西洋美術館の所蔵。

[3] BCMN Ms 375/6/5/1(f.41). «M. Matsukata m'a prié, à titre d'ami et en raison de mes fonctions, de mes rapports avec les artistes et ma coméptence professionelle, de faire réaliser pour lui.....»（ベネディットから鈴木商店への手紙の草稿、1919年11月17日付）

[4] Cf. BCMN Ms 375/6/5/1(f.69) «Je vous ai dit et j'aime à vous le répéter que je porte une très vif intérêt à cette fondation qui doit exalter en Extrême Orient le prestige de l'Art français. Je vous suis donc toujours reconnaissant de m'avoir associé à votre œuvre.»（ベネディットから松方への手紙の草稿、1920年8月14日付）

[5] クリスティナ・ビュレイ=ユリブ「松方とロダン美術館：あるコレクションをめぐる災厄」、展覧会図録『ロダンと日本』、静岡県立美術館、2001年、188頁。

[6] マチュー前掲論文、195-196頁。

[7] BCMN Ms 375/6/5/1 (ff.7-11).

[8] BCMN Ms 375/6/5/1 (ff.12-14).

[9] BCMN Ms 375/6/5/3 (ff.1-2).

[10] BCMN Ms 375/6/5/1 (ff.19-20).

[11] Cat.exh. *Private Collection of Edgar Degas*, New York: Metropolitan Museum, 1997, pp.5-8.

[12] *Ibid*., p.6.

[13] BCMN Ms 375/6/5/1 (f.35).

[14] 1959年に寄贈返還された「松方コレクション」の美術書に本書は含まれておらず、現所在は不明。

[15] Cat.exh. *Private Collection of Edgar Degas*, *op.cit*., p.5.

[16] Les Marques de Collections de Dessins & d'Estampes: L.421 (http://www.marquesdecollections.fr/detail.cfm/marque/5969/total/1 2023年1月8日最終アクセス)

[17] BCMN Ms 375/6/5/3 (ff.3-5, 7). 書類に競売のタイトルがないが、日付と落札作品の照合から、ブールドレの競売のひとつと特定した。

[18] BCMN Ms 375/6/5/3 (f.7).

[19] BCMN Ms 375/6/5/3 (ff.5-6). ダルデの《永遠の苦悩》については、前掲の『松方コレクション　西洋美術全作品』(第2巻)において筆者は、1923年2月から3月にかけてベネディットと鈴木商店のあいだで支払いの手続きが進められた作品のひとつと同一視したが(BCMN Ms 375/6/5/1 (ff.195-196), *Tête femme "Douleurs"*, 4,000 fr)、後者は別作品(現所在不明)と考えるべきであった。

[20] ビュレイ=ユリブ前掲論文、p.188.

[21] BCMN Ms 375/6/5/1 (f.62r). «C'était la perle de la collection Beurdeley.»

[22] Léonce Bénédite, «Préface», *Catalogue des dessins, pastels, aquarelles modernes... composant la collection de M. A. Beurdeley*...Paris : G. Petit, 1920, p.XI.

[23] BCMN Ms 375/6/5/1 (ff.76-78). "…2 pictures of Puvis de Chavannes, whose work I have not heretofore secured at all and was very anxious to obtain his specimen. You have now obtained a pearl of a gentleman collection besides another one. I can not help feeling very happy and fortunate about them. Thank you very much."

[24] BCMN Ms 375/6/5/1 (ff.61-63; 64-66). ff.59-60はff.61-63の英訳。

[25] いずれの手紙も冒頭に松方から2度にわたる連絡(「手紙と電報」「2通の手紙」)を受けたとある。INHAのベネディット資料群には含まれていないが、松方の手紙が別にあることを示唆している。直前の松方からの手紙は、1920年6月19日付の「妻の友人で彫刻家アマオカ氏」の紹介状とこれに触れた6月19日付の短い手紙。「アマオカ」は多くの屋外彫刻を手掛けていた旧三田藩の兵庫県三田市出身の彫刻家天岡均一と思われる。幸次郎の妻好子は三田藩最後の藩主九鬼隆義の二女。

[26] BCMN Ms 375/6/5/1(ff.61-63). «J'ai bien reçu votre lettre ainsi que votre câble – je n'ai pas répondu encore à la première, parce que j'atteindais tjrs la visite que vous m'avez annoncé de M. Hioki. Je réponds donc sans plus tarder aux questions que vous me posez à propos du groupe de Pygmalion et Galathée. Le marble dont il s'agit doit être évidemment celui qui a été donné par Rodin à Mlle Cladel. Il avait été vendu par elle à un marchand Georges Benheim pour le prix de 50.000 francs. Le marchand l'a vendu à un de mes amis M. Larcoche qui l'a payé 100.000. Cet amateur l'a ensuite rendu à Georges Bernheim chez qui je l'ai revu et qui m'a dit qu'il était à vendre au prix de 125.000 francs – toutefois il l'aurait cédé par 100.000 fr – Par conséquence le prix qu'on vous demandait 270000 fr, même en y comprenant la commission due à l'intermédiaire, était fortement exagérés. Plus ce qu'il y a de piquant de l'affiare, c' est que notre ami Edm Davis m'a envoyé ces jours-ci le catalogue d'une vente qui a lieu à Londres chez Christies comprenant divers ouvrages de Rodin parmi lesquelles figure ce marbre. La vente a du avoir bien hier 29 – j'ai demandé à Mr Davis de me renseigner sur les prix que ce merbre a pu atteindre. Je vous ferai savoir le prix aussitôt. Mais il est évident que tous les intermédiaires ou marchands qui vous proposeront des Rodin vous majoreront tjrs fortement les prix.»

[27] *Catalogue of fine tapestries, objects of art and old French and English furniture from various sources, and a collection of bronzes, sculpture and drawings by A. Rodin the property of a gentleman, which will be sold by auction by Messrs. Christie, Manson & Woods (L. Hannen, C.B.E., W. B. Anderson, and Capt. V. C. W. Agnew) at their great rooms, 8 King Street, St. James's Square, London, on Tuesday, June 29, 1920*.

[28] A. Le Normand-Romain et al., *Rodin et le bronze : catalogue des œuvres conservées au Musée Rodin*, Paris : Musée Rodin, 2007, t. II, p.622.

[29] BCMN Ms 375/6/5/1(f.76). "I have the great pleasure of receiving with many thanks your most interesting letter of the 30th, June last, on the 17th, ult.[.....] I beg to thank you warmly for your exhaustive description about the Groupe of Pygmalion & Galathee. I have instructed Mr. Hioki since not to buy it at named price, and it may be why he did not come and see you. I am very glad that I did not take it at that price after all, although it may be a good work of Rodin, since you know best about them, and your appraisement should be authority about them. I should like to be informed by your next letter how the piece was appraised at the London sale."

[30] BCMN Ms 375/6/5/1(f.68bis).

[31] BCMN Ms 375/6/5/1(ff.81-82).

[32] BCMN Ms 375/6/5/1(ff.87-88). "I beg to mention that the question on Pygmalion & Galathee has been settled and I am very thankful to your father that it was obtained cheap through his kind efforts for me. I wish you will particularly mention this to him."

[33] BCMN Ms 375/6/5/1 (f.84). "Very many thanks for your kind caution about the brokers and imitations; I shall never buy any piece without first consulting you, if I were going to buy one from the dealers in Paris."

[34] BCMN Ms 375/6/5/1 (f.64r). «Je devais aller chez Claude Monet [.....] Il est prévenu du choix que je dois faire chez lui de tableaux pour votre musée. Je ne crois pas qu'il

soit probable de mettre moins de 30.000 francs par une toile. / Quant à Renoir, dont je dois faire l'exposition au printemps prochain, les héritiers ne veulent faire aucune vente avant l'année prochaine, l'un des fils étant encore mineurs, mais je ne désespère pas de faire une acquisiton auparanvent. Les prix cependant restent de ce côté très élevés. / M Carrière qui est mort depuis 13 ans et qui a été mon ami, c'est moi qui a fait son exp. posthume en 1907. J'ai voulu vous acheter au moins une toile à la vente récente de son atelier [.....] les prix ont été si élevés que je n'ai pas osé suivre les enchères, mais puisque vous le désirez je vais voir auprès de la famile ou des amis.»

［35］BCMN Ms 375/6/5/1 (f.67). "AM WILLING TO PAY THIRTYTHOUSAND FRANCS AVERAGE PER PICTURE BY THOSE ARTISTS ALREADY CHOSEN SO PLEASE CONTRACT WITH EACH ONE OF THEM STOP."

［36］Hôtel Drouot, Paris, 2022/12/15, lot 4. "I know I requested you to buy several masters' Museum size pictures at average 30.000 francs and I shall be more than grateful to you, if good pictures by Renoir and Carrier [*sic*] could be bought through your influence. You have also kindly mentioned that Maurice Denis picture could be bought in Salon, and I beg to hasten to request you to buy five or six of his work, if good pictures are to be found. I like his work very much and shall be very glad to have them, if I can [.....] / I am afraid that the original amount of 1.200.000 Frcs. will not be enough to meet the above purchases, and I am going to allot another one million francs for the purchases. So please don't hesitate for selecting master pieces for my Gallery."

［37］陳岡めぐみ「松方コレクション　百年の流転」、展覧会図録『松方コレクション展』、国立西洋美術館、2019年、16-17頁。

［38］杉山菜穂子「モーリス・ドニと日本　松方幸次郎とレオンス・ベネディット 国立西洋美術館所蔵松方コレクションのドニ作品購入経緯に関する資料紹介」、『国立西洋美術館研究紀要』12号、2008年、27-37頁。

［39］BCMN Ms 375/6/5/3 (f.8).

［40］G-P et Michel Dauberville, *Renoir: catalogue raisonné des tableaux, pastels, dessins et aquarelles*, Paris :Bernheim-Jeune, c.2007, t. 2, no. 830.

［41］BCMN Ms 375/6/5/1 (ff.68-68bis).

［42］BCMN Ms 375/6/5/1 (f.80).

［43］BCMN Ms 375/6/5/1 (f.83.) "I shall be much obliged to you for information if you were successful in inducing M. Durand-Ruel to part with his Renoir and Puvis at what price."

［44］BCMN Ms 375/6/5/1 (f.90).

［45］BCMN Ms 375/6/5/1 (f.303). «J'ai vu là deux importants tableaux de musée. L'un, de grande taille – environ 1,80 de haut représente un jeune homme – c'est le portrait d'un artist mort l'an dernier, Frank Lami [Franc-Lamy] très lié alors avec le maître – agenouillé sur l'herbe auprès d'une jeune femme sourriante.»

［46］*Renoir*, *op.cit.*, v.1, no. 264.

［47］BCMN Ms 375/6/5/1 (ff.91-92). "I am now hoping to be in New York on or about the 6th or 7th May and to be in Paris some time early in June, when I hope to go over those all pictures and sculptures with you. /The letter from M. Durand Ruel enclosed in yours was carefully perused and I am hoping to be able to see these pictures mentioned therein. I shall also be glad if you will kindly look round in Paris for M. Renoir's of later dates, as I am desirous of finding more of his good works."

［48］手塚恵美子「和田英作日記［1921年8月16日～ 1922年2月7日］」、『近代画説』16号、2007年、16頁。

［49］Archives Durand-Ruelによる調査の結果にもとづく。なお、矢代幸雄は『芸術のパトロン』のなかで、ローザンベール画廊でヴァン・ゴッホの《アルルの寝室》とともにこの作品を見たと回想しているが、これは記憶違いと考えられる。Cf. 矢代幸雄『芸術のパトロン』、新潮社、1958年、43-45頁。

［50］Hôtel Drouot, Paris, 2022/12/15, lot 4.

The Matsukata Collection and Paris Art Dealers: The Léonce Bénédite Documents in the Institut national d'histoire de l'art (INHA), Part I

JINGAOKA Megumi

The president of Kawasaki Dockyard Co., Ltd. Matsukata Kōjirō (1866-1950) purchased a massive number of art works in major European cities from the mid 1910s to the mid 1920s. His goal was to build a museum in Japan dedicated to Western art. However, his shipbuilding firm's business difficulties in the late 1920s meant that his collection was scattered during the following decades. A group of works that had been stored in France and escaped such dispersal was then linked to the 1959 founding of the NMWA.

Léonce Bénédite (1859-1925), director of the Musée du Luxembourg and sole curator at the Musée Rodin, became Matsukata's most important collaborator as he collected works in France. The two men met in the summer of 1918 at the end of Matsukata's long sojourn in London. From then until his death in 1925, Bénédite worked on the casting of Rodin bronzes for Matsukata's proposed museum and assisted with the purchase of paintings in France.

The major Bénédite documents related to the Matsukata Collection – including letters and drafts of letters sent between those involved in these processes in Paris, Kobe, and London, along with invoices and payment records – are today housed in the Rodin Museum and the Institut national d'histoire de l'art (INHA). These materials dating from the Matsukata Collection's acquisitions period through its scattering have been referred to in previous studies of the collection. However, the sheer breadth of the materials and their information include many points which need reconsideration, comparison with related materials, and, in particular instances, more detailed individual examination. By offering an overview of the entire group of materials, there is also the hope that such information will lead to future research and surveys.

As part of this process, in this article I have focused on Matsukata's connections with auction houses and art dealers during his absence from Europe, from the time of his meeting with Bénédite in 1918 through the spring of 1921. First, based on the group of documents received from the Hotel Drouot auction house in Paris, this section introduces the details of the bids that Bénédite made on Matsukata's behalf at the much-talked-about 1918 auction from the studio of the painter Edgar Degas, and the 1920 auction of the Alfred Beurdeley collection. Next, I discuss Matsukata's purchase in the summer through autumn of 1920 of Rodin's marble sculpture *Pygmalion and Galatea*. The Bénédite materials of that period indicate that by then art dealers and brokers were already flocking to Matsukata, suggesting art works for his consideration, and how Bénédite proceeded with purchases primarily in Paris, all while also watching London art market trends. Around that time, the two men were involved in quite frequent interaction as they worked towards the purchase of high-ticket items. Bénédite confirmed Matsukata's intentions and began negotiations on his behalf with Durand-Ruel, the venerable art dealer in Paris, as he sought major works by Renoir and Puvis de Chavannes for Matsukata. Then, these efforts were connected to Matsukata's actual purchase of the works when he returned to Europe the following year, 1921.

It was Bénédite who provided the detailed information on the

proposed works, from the art works themselves to their artists and their market trends. Matsukata appreciated that helpful advice and clearly fully trusted him. However, as we read and compare the detailed content of the letters exchanged by the two men, we can see that their interactions were by no means one directional. Their correspondence reveals that Matsukata carefully considered the information he received, and clearly made his intentions and opinions known to Bénédite. These materials indicate that Matsukata was a collector actively involved in his acquisition process, far different from the famous tale of unknown origin, that he just pointed his walking stick at a gallery wall and told the dealer he wanted to buy all the paintings from here to there.